

## ツリークライミング 樹上の世界へ

ツリークライミング®ジャパン代表  
中部大学教授 ジョン ギャスライト



## 樹上から見える世界

幼少の頃、僕の父はアメリカでレーザー機器製造の会社を営んでいました。当時とても景気が良く、父の仕事も順調で僕の家族は幸せに暮らしていました。小学校の低学年まで何も問題がなかったのですが、ある時、父の会社で開発した医療機器に問題が発覚し、それが引き金となり会社は倒産し、父はアルコール依存症、家族もうまくいかなくなり両親は離婚しました。

僕はその後、施設に預けられ、しばらく親兄弟と別れて暮らすことになりました。しばらくして、母は再婚相手を見つけ僕も施設から戻り、それを機に母のふるさとのカナダに帰る事になりました。

大好きな祖父が住んでいるカナダに戻るの僕にとっては嬉しい事でした。ところがカナダの小学校では、僕のアメリカなまりの英語や、丸刈り髪型、そして施設に入った時からどもようになった癖がぬげず、カナダの小学校でいじめられっ子になったのです。

ある日、走って家に帰ると祖父が「どうしたんだ？今にも泣きそうな顔をしている

よ」。僕はその時、我慢していた涙を一気に流して大泣きをしてしまいました。母は新しいパートナーと嬉しそうに家族を立て直そうとしている、妹と弟もそれなりに学校に通って頑張っている、自分は長男だからしっかりなくてはと自分自身に言い聞かせて、いじめっ子が待つ学校に毎朝立ち向かっていったのです。その辛い気持ち、誰にも言えなかった悲しい気持ちが一気にあふれだしたのでしょうか。しばらく祖父の腕に抱かれて泣きました。

祖父は、僕の涙がおさまると「よーし！こんな時は木に登るのが一番だ！一緒についておいで」と僕の手をとり、近所の丘の上の大きな木の所に行きました。祖父が「この木に登っていくぞ！」と、すいすい登っていきました。その後ろから僕も一生懸命登っていったのです。その時は、祖父がいったい何をしようとしているのか、さっぱり理解が出来ませんでした。高い所のちょうどいい枝までつく「ジョン、ゆっくりそこに座って後ろを向いてごらん」と。振り返ってみると僕の目の前には大きな世界が広がりました。海の向こうの小さな船も見



写真1 空中ダンス

えるくらい大きな世界です。その時、祖父はこう言いました。「ほら、世界は大きいだろう？学校だけがすべてじゃない。向こうに広がる世界がみんなジョンを待っているぞ、問題が目の前に立ちふさがっている時はこうして視点を変えてみると、結構その問題が小さいことに気づくんだ、ジョン、小学校もあんなにちっぽけな物だ」。その時、樹上から見た世界は、悲しみがぎっしり詰まった重い心の扉を開いてくれ、大きな世界への第一歩を踏み出させてくれた大きな転機をくれたのです。

## 木はいつも同じ場所で

## 枝を広げて待っていてくれる友達

僕が日本に来たのは23歳。やっと夢が叶ってやってきた日本だから見る事、聞く事すべて新鮮で毎日が楽しかったです。でも1つカナダが恋しくなる瞬間は森の緑でした。来日した名古屋の街では自然を感じるの唯一公園。その公園でこんな事がありました。

「こら！勝手に木に登ったらダメだ！」公園の管理人の声が響きました。気持ちよく自分の背より低い横に伸びたベッドみたいなちょうど良い枝の上で本を読んでいた時でした。その公園のルールは木登り禁止だったのです。もちろん、日本に来て小さなアパートに住んでいた僕の庭は唯一、近くの公園でした。その時思ったのは、日本



写真2 ツリーポートで一休み

の子どもたちは木登りしないのかな？と。こんな両手を広げて腰を下ろして“登っておいで”と言わんばかりに待っていてくれるやさしい木に抱っこされたら、子どもたちは大きくなって木にやさしい気持ちになっていくのにどうしてだろうと。公園の看板の「自然を大切に」と「木登り禁止」が目に入り矛盾していると思いました。僕にとってその木はいつも同じ場所で両手を広げて待っていてくれる友達のようなのでした。そう感じた木だったのに、公園のおじさんの声がとても悲しかったのを覚えています。

## 夢に向けて一歩、また一歩

そんなある日、僕は車いすの女性と友達になりました。彼女は僕が木に登っている姿を見て「私も昔はおてんばさんで木登りしたのよ！でも今はこんな体になって木に登るなんて無理よね。足が動かないのだから……」彼女が帰った後、僕はその言葉が頭から離れなくて、どうすれば木にのぼれるだろう？と考え始めました。ツリークライミングはカナダで熊の調査をする為にロープにサドルという腰とお尻をカバーするベルトをつけて既に登っていた僕は、工夫すれば登れるかもしれない！と思い始めました。そして、いろいろ調べていたらアメリカにレクリエーションツリークライミングの団体、ツリークライマーズインター

## 【プロフィール】

John Gathright

ツリークライミング® ジャパン創業者 中部大学教授

国籍 カナダ

名古屋大学大学院卒業 農学博士

1985 年来日 1993 年日本人女性と結婚。4 人家族。愛知県瀬戸市味噌ダルツリーハウスに住む。

2000 年ツリークライミングジャパン設立。2002 年スミソニアンマガジンに活動紹介。

2005 年愛地球博でグローイングビレッジプロデューサーとして活躍。

2012 年 JAA (日本アーボリスト協会) 設立。2013 年 ATI (アーボリストトレーニング研究所) 設立。

2014 年 ISA (International society of Arboriculture) 理事就任。



写真3 ツリークライミングイベント

ナショナル (TCI) という団体があり、その代表のピーター・ジェンキンス氏に会うためアメリカまでに行き、いろいろな登り方を教えてもらいました。でも、ピーター氏でさえ障害者のツリークライミングはリスクが大きすぎるだろう、とあまり前向きに応援はしてくれませんでした。

日本に帰国し今まで誰もやった事がないかもしれないけれど、一歩踏み出してやってみないと分からないと僕と彼女は一緒に練習を始めたのです。すると彼女の夢を応援するために友人が集まり、いつの間にか練習の日には沢山の仲間が集まっていました。そしてついに7メートルくらいの高さの木に登ることが出来ました。「私、鳥になったみたい」と涙を流してとても喜んでいました。彼女にとっては、失いかけた夢が叶って自信になったし、応援していた周りの僕たちも本当に夢を現実にできるのだという勇気ももらいました。ツリークライミング練習がリハビリとなり体の機能もどんどん改善してきたと彼女自身も前向きにいろいろチャレンジするようになってきました。車いすの生活から樹上の世界へ新しい冒険を成功させた彼女は、次の夢も語ってくれました。それは“世界一大きな樹、ジャイアントセコイアに登る夢”。そしてボランティアの仲間と2年の歳月をかけトレーニングを重ね、彼女はアメリカカリフォルニア州にある世界で5番目に高い巨



写真4 森に「おじゃまします」と言って入っていく！

木、ジャイアントセコイアのツリークライミング登攀に成功しました。その夢の実現は北米や日本のテレビでも取り上げられアメリカの障害を持ったフィジカルチャレンジャーからも応援メッセージをもらったりと彼女はもちろん、応援した僕たちも大きな自信に繋がりました。

#### ツリークライミング® ジャパン誕生

ジャイアントセコイア登攀というフィジカルチャレンジャーの応援に集ってきた仲間と立ち上げたツリークライミング普及団体が「ツリークライミング® ジャパンTCJ」です。2000年に設立、そして現在に至り、今ではツリークライミングの技術を習得したライセンス保持者が3,200人以上、そしてツリークライミング体験者数はもう数えきれません。2005年の日本国際博覧会では自然体感プログラムの「グローイングビレッジ」というパビリオンをプロデュースし、期間中3,000人の体験会を行い国内外のフィジカルチャレンジャーや世界の人々



写真5 木のモノマネ モクモク体操



写真6 木に挨拶 今日一緒に遊ぼう！

にツリークライミングを楽しんでいただきました。現在もTCJが育成した公認インストラクターや公認ファシリテーターが全国各地で講習会やイベントを開催し、素晴らしい樹上体験の機会を提供してくれています。僕自身もよくイベントに行き、子どもたちと一緒にツリークライミングをすることで毎回新しい発見をしています。そして木は一本一本違うけれど、目に見えない土の下で根っこを絡ませてお互いを支え合っている、栄養を分け合っているんだよとお話します。そしてその日に一緒に体験した友達、家族、その日初めて会った人同士も一人一人それぞれだけれど、心でつながり、目に見えない根っこのような糸で結ばれて、ひとつの社会になっているんだよとお話しています。

#### 日本の自然を、公園を、森を豊かにする

ツリークライミングを体験しにやってくる子どもたちに、まず森に入っていく時には「おじゃまします！」と自分が森に遊びに来させていただきました、という気持ちで森に入っていくようにしています。遊び終わると必ず木に「今日、一緒に遊んでくれてありがとう！」と挨拶をして帰ってもらいます。そして体験会の最後に体験成功を祝ってコングラチュレーションカードを渡します。そこには子どもたちが木に登った事を讃えるとともに、一緒に遊んだ木は昔のアメリカンインディアンが木を「立っ



写真7 参加の子どもと記念写真

ている人」として命ある大切なものとして守ってきたこと、その木と友達になってありがとうという気持ちを自然にやさしい生活をするので木にお返ししようね、と書いてあります。

ツリークライミングの良いところは、人間主体ではなく自然が主役、当たり前にある自然に改めて感謝するという気持ちになれる事です。またフィールドは始めと終わりは同じ状態、それどころか樹木から枯れ枝をきれいに剪定し、手入れされた状態でイベントが終わる事です。眠っていた森を活かして森も人間も元気になることができます。国や行政の方には今では私たちの一度も事故のない実績や活動を理解していただき、国営公園や公共の森、都会の公園などでもツリークライミングが体験できるようになりました。ツリークライミングは人材育成と専用の道具に時間とお金がかかりますが、ツリークライミングというプログラム自体に施設などを建設する必要がないのでこれからもいろんなところで有効なプログラムとして使っていただけたらと思っています。

さあ、樹上の世界へ行きましょう！いつも下から見上げる木を、上から見下ろしてみませんか？

鳥と同じ目線で緑の香りに包まれてさわやかな風を頬にうけ、のんびり過ごしてみませんか。